外来語に関する研究動向

～使用意識と言語接触の視点から～

堀　切　友紀子

お茶の水女子大学　人文科学研究
第９巻（2013）別刷

人文科学研究　No.9, pp.113-124　　March 2013

外来語に関する研究動向

～使用意識と言語接触の視点から～

堀　切　友紀子

1．はじめに

平成14年から18年にかけて，国立国語研究所「外来語」委員会は，公共性の高い場で使われている分かりにくい外来語の理解を向上させることを目的とし，４回にわたって「外来語言い換え提案」を発表した(国立国語研究所「外来語」委員会，2006)。外来語を言い換える必要があるとする流れは，日本語において外来語が「分かりにくい」ことばとして一般に認識される傾向があることを示している。特に，外来語が数量的に増加しているとする批判的な意見も見られ，日本語母語話者にとって外来語は「日本語の乱れ」として否定的に捉えられる傾向がある。また，日本語教育の現場においても，外来語は学習者にとって「難しい」「苦手な」ことばとして扱われている実態が報告されている。しかし，陣内（2008）においては，言語運用から見た外来語研究は，コミュニケーション場面の発信や受信の際に外来語が人の心にどのように作用するのかという「心理機能」を探る必要があるにもかかわらず，これまでの外来語研究ではその言語使用者の心理的側面については十分な研究が行われていないことが指摘されている。

そこで，本研究は，外来語に対する否定的心理とその背景について概観した上で，外来語に対するイメージや外来語使用の際の意識を日本語母語話者と日本語学習者の両者の視点から整理する。その上で，複数の言語にまたがる要素を持つ外来語に対する意識を言語接触の視点から捉え，外来語と異文化理解との関連を明らかにすることを目的とする。

本研究の構成は，以下のとおりである。まず，外来語の定義と数量的推移の実態を明らかにした上で，外来語に対する否定的心理とその背景を，言語観，コミュニケーション，英語学習の観点から整理する。次に，外来語使用に対する意識を日本語母語話者及び日本語学習者の視点から概観し，接触言語として外来語を取り上げることの意義を取り上げる。さらに，接触場面における外来語使用の特徴から，外来語と異文化理解の関係に焦点を当て，今後の外来語研究の持つ可能性を検討する。

2．外来語の定義と数量的推移

本研究における「外来語」とは，日本語の語彙の中でも外国語を語源とするものであり，カタカナで表記される語彙を指すこととする。この他言語から借用され日本語として使用されている語を「借用語」や「カタカナ語」ではなく「外来語」と呼ぶ理由には以下の２点が挙げられる。まず，田中（2002）は，英語との関連においてloanwordと対応する必要性に加え，欧米由来の外来語である外来語の多くが日本語となっており，親密度も高いことばが多いため，漢語と区別する必要がないことを指摘している。また，

外来語は，近年「カタカナ語」として扱われることもあるが，その場合はカタカナで表記される擬音語（例：ドスン）や擬態語（例：ピカピカ）に加え，固有名詞（例：アメリカ）や強調表現（例：ステキ）も含まれることが多い。しかし，本研究においては擬音語，擬態語，固有名詞や強調表現等を含まず，外国語を語源とする語彙を指す用語に関して異文化の視点も取り上げることから，外から来た語彙という意味合いを持つ「外来語」を用いる。

この，外から日本語に入ってきた要素が日本語の中で増えつつあるという視点から，メディアにおける外来語使用の実態を取り上げた研究に，松浦（2006）や，橋本（2010）等がある。松浦（2006）は，1948年から2006年の朝日新聞縮約版を対象に，１日分に登場する外来語の10年分のデータを分析した。その結果，語彙の増加は全体的に非常に緩やかであり，新聞では外来語に限らず分かりにくい語を極力使用しないように心がけられており，そのため新聞に登場する外来語は少ない水準にとどまっていると指摘している。

また，橋本（2010）は，1911年から2005年までの朝日新聞の社説及び，1932年から2002年までの読売新聞の社説を対象に，外来語の数量的実態を明らかにし，外来語の増加・減少傾向を示している。そこでは，外来語の増加過程は様々な資料に共通して「初めはゆっくり，半ばで急速に，最終段階では再び緩やかに」というＳカーブ（slow–quick–slow pattern）を描いているが，その増加開始の時期（take-off point）や増加スピード，飽和水準は資料によって異なると結論づけている。その上で，「最近外来語が多すぎる」という批判が常に存在するのは，言語資料により外来語の増加時期が違うためにいつもどこかで外来語が急増しているという認識が生じているからだと指摘している。

以上のように，外来語増加への批判に対して，実際の報道媒体における外来語使用回数はそれほど増加していないという実態が明らかにされている。そのような現状にもかかわらず，外来語に対する肯定・否定の議論が絶えないのは，外来語の数量的な問題のみではなく，外来語を理解・使用する話者の心理的要因も関連していると考えられる。

3．外来語に対する否定的心理とその背景

山田・難波（1999）は，過去50年間の新聞資料の検討を通して，外来語に関する記事の内容別分類と検討を行った結果，解説中に執筆者の立場が表明されているものは，外来語に対する不平不満，疑問，不安を絡ませた否定的なものが大部分であることを示した。また，言語学の分野においても，日本語における外来語の現状を「問題」と捉える研究が複数あり，外来語に対して否定的な立場をとる研究が肯定的なものを上回るのが現状である。以下では，外来語を否定的に捉える心理とその背景を，言語観，コミュニケーションにおける問題，英語学習との関連の視点から整理して概観する。

3.1．外来語と言語観

伊藤（2008）は，「現代の日本人は外来語を用いることによってさらに言葉の幅を広げ，豊かにし，活性化し，発展させていこうとしている」とし，外来語の使用が日本語にとって肯定的な影響を与えていると捉えている。また，井上（2001）においても，「外来語の受容は，その言語の話し手の民族意識の度合い，逆に言えば国際化の程度を象徴する。今のところ日本には，語彙の国際化を押しとどめようという動きはない。」と好意的な見方を示している。

一方で，日本語の中に存在する語種の一つとして外来語を捉えた際に，外来語が日本語の語彙や使用者

の言語観を乱しているという視点が，外来語に対する否定的な心理の背景に存在することが明らかにされている。池田（1974）は，「外来語の異質性から生まれる新鮮感に乗じて野放図に，無自覚なほどに外来語の濫用流行を煽り立てている社会情勢」を批判的にとらえ，外来語の濫用が日本語の品位の下落を黙許することになると論じている。また，山田（2005）は，外来語の非日常性は好奇心によって支えられるが，刺激が充満すれば言葉に対する感受性は弱められ言葉の活力は失われるとし，外来語が日本語使用者の言語観に否定的な影響を与えることを懸念している。さらに，相澤（2003）は，「たとえ漠然とではあっても日本語そのものに被害が及ぶと考えることの中には，日本語が連綿として維持してきた良き言葉のシステム（仕組み）と，それによって支えられてきた良き伝統文化とが二つながら崩されていくような危機感が含まれている」と伝統維持に対する脅威として危機感を示している。

このように外来語に対して相反する評価が同時に存在している実態は，柴田（1994）においても指摘され，外来語に対する態度の違いは，外来語が日本語の中に入ってきたときの混乱に対する回答と関連するとしている。混乱を防ぐべきだという考えであれば外来語拒絶派となり，防げない，または防ぐに当たらないという考えであれば外来語容認派ということになる。また，日本語母語話者間でも異なる外来語に対する態度が存在する理由の一つに，異なる言語観を挙げているのが石野（1983）である。そこでは，外来語に対する感覚について，有識者は在来の日本語を中心とし，外来語を「よそもの」と見てそれに対置し，その上で日本語になっているかどうかを判定するが，若年層は外来語だからと言って特別視せず主に使用頻度によって判断するが，それが好ましい言葉だともあるいは必要な言葉だとも思っているわけではないと述べている。つまり，日本語をどのようなものとみるか，「あるべきもの」とみるか「現にあるがままのもの」とみるかという立場の違いが，外来語に対する感覚もしくは判断に影響しているということである。また，石野（1983）では，有識者と大学生という異なる対象を扱っていることから，この言語観の背景には世代による差異も影響していると推察される。

3.2．外来語使用によるコミュニケーションの問題

林（2011）は，外来語は日本人同士の世代差や職種の違いによって，コミュニケーションギャップを引き起こす原因になるとしている。井上他（2006）においても，外来語の使用が世代間コミュニケーションの障害となることや，社会的な情報の共有を妨げる可能性を指摘している。以下では，コミュニケーションの視点から外来語使用の問題を取り上げる。

山田（2007）は，外来語の受け入れは若い世代の仕事であり，結果として世代間で言語使用上のずれが生まれることが，外来語によるコミュニケーションの不成立の要因となり得ると指摘した。この若年層が高年層に比べて外来語をより理解し使用していることを実証的に検証した研究に，松田（1991），八田（1994），関根（2003），宮本（2004），椙村（2007）がある。これらの研究では，10代から60代または80代までの男女を対象に，実際の外来語使用頻度についての量的調査を行っている。その結果，具体的に外来語使用頻度の差がみられる境界に関して，椙村（2006）においては40代が外来語使用の境目であり，関根（2003）では50代がその境目であることを示した。

一方，外来語が必ずしも若年層だけのものだけではないとした研究に杉島（2006）がある。そこでは，18歳から25歳の大学生と，34歳から68歳の中高年者を対象として，外来語使用頻度の調査を行った結果，大学生より中高年者の方が外来語をより使用していることを明らかにした。その原因として，大学生の育ってきた言語環境が既に外来語の氾濫した状況であったため，その反動として外来語を用いることが少なかったと推測している。しかし，この調査において35歳以上をすべて中高年層という同一群として扱っ

ていることには，詳細な年代における差異の実態が明らかになっていないという限界がある。

この外来語の世代間の差異に加えて宮本（2004）は，政治・経済用語としての外来語と日常語として用いられる外来語では，その使用の度合いが年代別で異なることを明らかにしている。つまり，どの領域の外来語を対象として調査を行うかによっても世代による差異がみられる可能性がある。この世代間での言語使用上のずれの階層が幾重にもなった結果生じるコミュニケーションの不成立が，外来語に対する否定的な心理を生み出していると推察される。さらに山田（2007）は，この世代差による縦型のコミュニケーション・ブレイクダウンと対応して，横型のコミュニケーション・ブレイクダウンが存在することを指摘し，その背景には情報の送り手と受け手との間の情報認識の差異があるとしている。これは，宮本（2004）の挙げる「特別な領域の外来語」が言語使用者間のコミュニケーションの不成立へとつながることと関連していると考えられる。

具体的に専門領域に特化した外来語の使用やその背景を調査した研究の一つとして，手島（2009）は，高専専攻科学生30名程度を対象に調査を行い，個々の外来語の理解度には分野ごとにばらつきがあり，現代の若者一般の傾向として「情報」分野の外来語の理解度が高く，「行政」と「経営」分野の外来語の理解度が低いことを示した。また，大谷（2007）は，美容芸術短大生398名を対象に，美容についての外来語に関する調査を行い，同じ指示的意味を持つ語が複数存在する場合，それらの意味，語感，用法に住み分けが生じていることを明らかにした。その上で，美容の分野では一般的に使用されるよりはるかに高頻度で外来語が用いられるため，新しく入ってきた外来語は既存の和語，漢語との衝突を回避するため，早い速度で差別化が行われており，たとえそのスピードに追い付いてこられない人がいようとも，美容界は多少の混乱は覚悟の上で，積極的に外来語を導入しようとしていると指摘している。この他にも，老人看護と福祉分野の外来語を対象とした斉藤・渡邉（1997），精神保健衛生分野を扱った池添（2008；2009；2010），社会福祉分野を扱った北村・池添（2008；2009）等がある。

以上のように，専門分野において外来語が使用されている現状について，大島（2005）は，専門分野で使用される語彙を理解できる層と，必ずしも理解できない層に分かれることが，情報の不平等の問題へとつながっていると指摘している。また，斉藤・渡邉（1997）は，外来語専門用語はカタカナで表記されることにより言語の意味が失われ不正確なニュアンスを専門家に植え付ける可能性を挙げている。さらに，仙波（2002）においては，「ライフライン」という外来語の英語と日本語における意味や使用実態を取り上げ，現代の外来語の中では英語においても定義も未成熟な言葉が日本語の中に持ち込まれている専門分野の外来語の問題を指摘している。

つまり，世代間における外来語使用のずれに加え，専門分野において外来語が使用されることで情報の不平等の問題が生じている現状と，外来語自体の定義やニュアンスが不安定な場合があるという実態が，外来語をコミュニケーションの阻害要因として捉える否定的な心理を生み出していると考えられる。

3.3. 英語学習における外来語の影響

鳥飼（2007）は，外来語の使用が「国際語としての英語を使用している」という感覚とつながっていることが，外来語使用の背景に影響していると指摘している。実際に，大島（2003）は，外来語を社会環境からのインプットであると考えれば，英語教育で正しいインテイクのプロセスを提供することによって，英語というアウトプットが期待できると述べ，外来語が英語学習にとって利益をもたらす可能性を示している。

しかし，現在の日本の英語教育においては，外来語が英語学習の障害となるという批判的な立場をと

るものが圧倒的に多いのが現状である。その理由として，外来語の発音が原語である英語と異なることが，英語の音声学習の干渉となっていることが挙げられている（スワレス・田中，2001；Goble，2001；Jennings, 2004）。また，丸山（1978）や船津（1993），大島（2005），森光・中島（2008）においては，外来語と英語とを混同している，もしくはそれらの区別が曖昧になっていることが，英語学習の過程で不正確な文法，読解，スペリングへとつながっていることを指摘している。このような背景から，現在の英語教育の現場では，外来語が学習項目として扱われないことが多く（大島，2003；2005），英語教師も外来語について言及しないか否定的な見解を示している（Daulton, 2011）との報告もある。

グローバル化が急速に進む現代社会においては英語が共通語となる傾向は加速しており，その学習において外来語が障害となるという認識が，外来語に対する否定的な心理へと繋がっていることは想像に難くない。

4．外来語使用に対する意識

これまで見てきたように日本語における外来語には，言語観，コミュニケーションの問題，英語学習における影響等の様々な要因により，否定的な心理が存在しているのが現状である。それにも関わらず，現代日本語において外来語使用の減少は報告されていない。以下では，その実態を実際の外来語使用の背景にある「和語・漢語・外来語」という分類の中でのイメージと，日本語母語話者及び学習者の外来語使用に対する意識の観点から整理する。

4.1．外来語のイメージ

天本（2006）は，「和語・漢語・外来語」という分類において，外来語はプラスのイメージを表すものであり，和語では言いにくい語に肯定的なイメージを付加するものであると特徴づけている。同様に，この外来語が肯定的なイメージを持つことは，成田・榊原（2004），熊抱（2005），鳥飼（2007）においても指摘されている。成田・榊原（2004）では肯定的なイメージの具体的な要因として，「新しさ」「国際性」，熊抱（2005）では「お洒落」「知的」「楽しそう」等が挙げられている。また，鳥飼（2007）は，外来語には異質性と斬新な響きを併せ持つ語感があり，「専門性」というステイタス顕示に使われることもあることを示している。さらに，和語を使うよりも外来語を使うことで現実が曖昧にぼかされ覆い隠され，明るく軽く響くことからぼかし効果が利便性として認識されるとしている。

上述の外来語のイメージを実証的に検証したものに，三輪（2001），菊地（1993；1994），Toksoz（2012）がある。三輪（2001）は，大学生129名を対象に外来語の印象を明らかにするため質問紙調査を行った結果，「外来語は新しい」「外来語は洒落ている」という印象が持たれていることを明らかにした。また，菊地（1993）では，大学生119名を対象に和語，漢語，外来語のイメージの差異を質問紙調査により検討した結果，外来語には「現代的」「明るい」「若々しい」「優雅」という固有の語種イメージが存在することを明らかにした。同様に，菊地（1994）でも大学生111名を対象に質問紙調査を行った結果，外来語には「現代的」「明るい」等のイメージが共通していることを示した。さらに，Toksoz（2012）においては，日本人大学生112名と，トルコ人大学生64名を対象に，それぞれの外来語の使用率や受容意識について質問紙調査を行った結果，日本人大学生にとって日本語に定着している外来語は「軽率さ」を与えることなく，「格好よさ」「表現豊富」「会話親和」のような因子と結びつきやすいことが明らかにされている。

以上のように，外来語には和語や漢語との比較において肯定的なイメージを持たれていることが明らか

になった。その背景には，外来語の持つ「異質性」「新鮮さ」「斬新さ」「専門性」「曖昧さ」などが挙げられたが，このうち「異質性」や「専門性」等は上述の外来語に対する否定的な心理の背景とも重複しており，外来語の存在には否定的な印象を持っていても，実際に使用する外来語に対しては語種として肯定的なイメージを抱くというアンビバレントな状態となっている可能性が示唆された。

4.2. 日本語母語話者の外来語使用に対する意識

上述のアンビバレントな心理を背景に，実際に日本語母語話者は外来語を使用する際にどのような意識を抱いているのであろうか。国立国語研究所（2006）は，年配の世代は外来語に覚えにくさを感じその使用を好ましくないものと考えているのに対し，若い世代は外来語の通じやすさを便利に感じ，その使用を好ましく考えていると指摘している。石綿（1991）においても，外来語をどう思うかという調査を行った結果，若い人ほど積極的肯定もしくは現実肯定と肯定的に見ているのに対し，高年齢の人ほど批判的な人が増加することが示されている。一方，若年層とそれ以上の年代を対象に，外来語使用の状況と対人関係構築の側面からその意識を検証したものにイハス（2010）がある。そこでは，大学生10名と30歳以上の10名に対して質問紙調査を行った結果，外来語は若年層と熟年層の両者とも，細やかな意思を表す，または仲間意識を強化する状況でよく使われ，どちらの層においても「情動」と「地位」についての意識が共通していることが明らかにされている。

つまり，外来語使用についての意識には年代による差のみではなく，使用場面や，対人関係などの個々の背景が影響を与えていると考えられる。この個人的背景等によって，外来語使用に対する意識が形成されることを明らかにしたのが鈴木（1999）である。そこでは，専門家の発言や世論調査を引用し，その外来語観を①積極的賛成（礼賛），②消極的賛成（肯定），③積極的反対（排斥・統制），④消極的反対（否定）の４つに分類している。この多様な外来語使用に対する意識に関しては，国立国語研究所が2004年，2005年に満15歳以上の男女4,500名を対象に全国規模の調査を行っている（国立国語研究所，2004；2005）。これらの大規模な調査結果においても，外来語使用に対する意識は年齢や職業分野に加え，使用場面や使用理由によって異なることが明らかにされている。つまり，上述の外来語に対するアンビバレントな状態が，実際の外来語使用においても「外来語は好ましい」と「外来語は好ましくない」という相対する意見がそれぞれ一定数存在する実態へとつながっていると考えられる。

4.3. 日本語学習者の外来語使用に対する意識

同じく日本語を使用する日本語学習者に関して，日本語教育の分野でこれまでに行われてきた外来語研究は，教材研究，表記や音声の習得，母語の影響を取り上げたものがほとんどであった。その結果として，日本語学習者にとって外来語の習得は困難である現状や，外来語習得には学習者自身の母語が強く影響を与えていることが明らかにされてきた（モトワニ，1991他）。それらの実態を受けて，実際に学習者自身が外来語使用に対してどのような意識を持っているかという心理的側面について扱った研究は僅少ではあるものの，その中に陣内（2008）や堀切（2010；2011）がある。

陣内（2008）は，日本語学習者の外来語に対する意識を探ることにより，彼らが感じている困難点やニーズなどを明らかにすることを目的に，中国語，韓国・朝鮮語，英語，それ以外の言語を母語とする日本語学習者479名を対象に質問紙調査を行った。その結果，日本語の中で外来語が使われているのをどう思うか，という外来語に対する態度は，中国語話者と韓国語・朝鮮語話者は「よくない」とする割合が最も高く，それ以外の母語話者は「よい」とする割合が最も高いことが明らかになった。前者が外来語を否定的

に考える背景には，東アジアに位置し共通の文化を保持してきたものから見た反応である可能性が指摘されているが，その点に関する実証的な研究は未だ行われていない。

また，堀切（2010）は，英語を母語とする日本語学習者の外来語の捉え方を明らかにすることを目的に，英語を母語とする日本語学習者11名に対して半構造化インタビューを行った。その結果，外来語を日本語として捉えている認識と，英語として捉えている認識が存在することが明らかになり，外来語を日本語として捉えている場合には，外来語に対して肯定的な感情を抱きやすく，その結果として積極的な外来語使用または文脈を意識した使い分けといった行動に至ることが見出された。一方，外来語を英語として捉えている場合には，否定的な感情を抱きやすく，外来語の使用に対しても消極的になる傾向が示された。このことから，外来語を自分の母語として捉える度合いは，対象文化を自文化またはホスト文化の枠組みで捉えようとする異文化受容とも関連している可能性が示された。さらに，堀切（2011）は，英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・使用行動と異文化受容態度との関連を実証的に明らかにすることを目的とし，英語を母語とする日本語学習者104名を対象に質問紙調査を行った。その結果，学習者の外来語に対する感情や使用行動が，異文化受容態度を予測する指標となる可能性や，外来語が異なる言語や文化を理解する上での媒介となる可能性が示された。

以上のように，日本語学習者の間でも外来語使用に対する意識には言語意識や背景要因が影響を与えていることが推察され，そこに異文化の視点が関連していることが指摘されている。つまり，外来語に対する意識を検証するうえで，日本語のみあるいは英語のみの視点から捉えることには限界があり，複数の言語が影響し合って存在している語彙として改めて捉え直す必要性が示唆される。

5．接触言語としての外来語

5.1．接触言語学の視点から捉えた外来語

外来語を日本語と外国語が接触した結果生じたものとして捉え，日本語における外来語を接触言語学の視点から分析したものに，鈴木（1997；2000）がある。鈴木（1997）は，二つ以上の言語が接触した結果，一方の言語が外来語化される過程を７つの段階に分けて整理している。その段階とは，言語の「接触」のあと，一方，または双方から「借用」が起こり，借用される言語の中で「転用（変容）」され，「干渉（同化）」された結果，「受容」され，「定着」するかまたは「排除」される過程をたどるというものである。さらにそこでは，この理論に拠って外国語と日本語の接触を歴史的に分析し，外国語の定着，浸透度を分析した結果，日本語の外来語の特徴は文化的に優位な言語から外国語をとりいれる意識が働いた「文化借入型」であることを見出した。このように，接触言語学の視点からも，外来語を使用する背景には使用者自身の意識や意図，選択が大きく影響を与えていることが明らかになっているが，鈴木（2000）は，それらを扱った研究は未だ数少なく，今後様々な分野における話し手，聞き手，場面の差異や特徴を考慮に入れた研究が必要であると指摘している。

5.2．接触場面における外来語使用とアイデンティティ

それでは，実際の日本語による母語話者と非母語話者のコミュニケーション場面において外来語はどのように使用されているのか。細田（2008）は，日本語母語話者と英語母語話者の日本語会話における外来語の使用に焦点を当て，会話の連鎖の中で言語の「第一言語話者」および「第二言語話者」というアイデンティティがいかに会話参与者自身に構築されるかを検証した。そこでは，15組の日本語第一言語話者

同士の日本語会話と，16組の日本語第一言語話者と第二言語話者の日本語会話を分析した結果，外来語や英語をどのように発音するかの選択は，会話参与者のアイデンティティの志向に基づいていることを示した。同様に，田崎（2009）は，英語で研究活動を行う大学院に在籍する留学生８名の日本語母語話者と非母語話者同士の会話データを分析した結果，外来語の英語発音・日本語発音に関しては，それらが会話参加者の相手への印象の背景となったり，話者同士の関係構築の要因となったりすることを示している。

アイデンティティに関してTajfel（1978）は，社会的集団への所属意識を社会的アイデンティティとして，ある個人の感情的および価値的な意味づけを伴う自分がある社会集団に所属しているという認識であると定義している。この社会的アイデンティティを第二言語教育との関連から捉えた池田（2007）は，アイデンティティとは言語相互行為を通じて参加者の共同作業によって構築される，個人の「立ち位置」や「自己表現」であるとしている。つまり，言語相互行為において調整される立場やその所属意識が社会的アイデンティティに影響を与えているということは，接触場面における外来語使用とも関連していると考えられる。

この接触場面において日本語を第一言語とする日本語母語話者に焦点を当てた研究に，ロング（1992a；1992b）がある。ロング（1992a）は，日本語母語話者37名を対象に，他言語話者に対する日本人の言語行動を調べ，対外国人行動の分類を試みた。その結果，外国人の聞き手を意識した母語話者は，普段日本人同士で話す時に比べて外来語を多く使用する行動が目立つことが示された。同様に，ロング(1992b)は，日本語におけるフォリナー・トークの一つとして「外来語の頻用」があることを指摘し，聞き手が外国人であることを意識した母語話者が，外来語を普段以上に使う，過剰使用することを特徴として挙げている。

一方，日本語を第二言語とする日本語学習者に焦点を当てた研究には，ファン（2003；2010）などがある。ファン（2003）は，日本語学習者３名を対象に外来語に対する意識を探るとともに，日本語母語話者が相手の場面と，日本語非母語話者同士の第三者場面とでは言語規範が異なることを明らかにした。その結果，日本語学習者である対象者の語りとして以下の言説が示されている。

> *以前は偏見を持っていたのか，外来語は使おうとしていなかった。最近は少し納得してきて日本人と使うようになった。しかし，相手も外国人，特に英語圏の留学生の場合，とても恥ずかしく感じて，外来語より英語を使ったり，同じ意味の日本語が分からなくても似た意味の日本語を使ったりしている，また，アジア系の学生の英語能力は分からないので，基本的に使わない方がいいと思っている。*

この言説は，ファン（2003）において，日本語母語話者，英語母語話者同士，非英語母語日本語学習者との３つの場面において外来語使用の際に異なる意識が存在することを裏付けている。この現象について，ネウストプニー（2000）では，日本語学習者の日本語使用の場面において，外来語の使用やその発音に関しても，話者のアイデンティティに対する意識が反映されている可能性を指摘している。また，ファン（2010）は，日本語母語話者と非母語話者の異文化接触による言語の機能を取り上げており，言語と文化を異にする個人同士がコミュニケーションを行う接触場面で，「参加者がどのように主観的に自分の言語をとらえ，相手と交渉し，場面ごとにふさわしい言語を使用するか」が重要であると指摘している。

以上のように，接触場面における外来語使用の実態について，日本語母語話者は非母語話者への意思疎通のため意識的に外来語を頻用しているのに対し，日本語学習者は外来語を回避または制限する傾向にあり，両者においてそれぞれの話者のアイデンティティと関連して外来語使用にも差異が存在していることが示唆された。今後はその実態を包括的に検証することで，外来語使用の背景にある心理をより具体的に明らかにすることができると考える。

6．外来語と異文化理解の関連

外来語が日本語母語話者間においても，日本語母語話者と日本語学習者との接触場面においてもコミュニケーションに大きな影響を与えている実態は，言語接触と異文化理解との関係においても論じられている。宛・佐藤（2007）は，言語接触は異なる言語に変種を生じさせるとともに，文化理解を促進する重要な機能を持っていることを示している。同様に，外山（1994）は，外来語が多くなるということは，外国の文物文化に学ぶ気持ちが強い証拠であることを指摘し，それが生活を構成する言葉に端的に表れていることを示している。さらに，大島（2005）は，その地域の文化や言語の変化に応じて言語は変化していくものであり，外来語を学習することは，日本語を学習すると同様に社会文化の変化に応じた言語変化を学習することになるとしている。巌（2007）も，外来語の増加は，異文化とのかかわりの中で文化の多様性を促すだけでなく，異質文化への統合による文化発展の可能性の道も開くと述べている。

この外来語と異文化理解の関連の実証的な研究としては，上述の英語と母語とする日本語学習者を対象とした堀切（2011）の研究があるが，日本語母語話者を対象とした実証的な研究は未だ行われていないのが現状である。そのため，今後は日本語母語話者についても様々な言語使用場面における外来語の果たす心的機能を異文化理解の視点から明らかにする必要があると考える。その際に，外来語を接触言語学の視点から捉え，同一文化内あるいは接触場面での外来語使用とアイデンティティとの関連を検証することで，日本語母語話者の外来語に対する意識を新たな側面から明らかにすることが可能になると考える。また，このアイデンティティと関連して，様々な母語を持つ日本語学習者との関係性等も視野に入れ，自文化および相手文化，もしくは第三者文化という視点から外来語を取り上げることで，現代日本語によるコミュニケーションにおいて外来語が果たす役割や，効果的な外来語の扱い方を探ることが可能になると考える。

7．結語

本研究は，外来語に関して主に使用意識と接触言語の視点からこれまでの研究を概観した。その結果，外来語に対する意識には日本語母語話者及び日本語学習者の持つ外来語に対する意識には否定的な側面が多いことに加え，接触場面における外来語に対する意識の差異が生じていることが明らかになった。また，複数の言語の影響を受けた外来語が，複数の文化背景を持つ人々の接触場面でのコミュニケーションにおいてアイデンティティの意識化の役割を果たしている可能性が示唆された。今後は，実際の接触場面における外来語使用と異文化接触に焦点を当てた実証的な研究を行うことにより，英語教育，日本語教育，異文化理解教育における効果的な外来語の役割を明確化していく必要がある。

＜引用文献＞

Daulton, E. F. (2011)「英語学習者の外来語に対する考え方」『龍谷紀要』32(3), 1-1, 1 龍谷大学

Goble, D. (2001) Loanword-Induced Interference in Japanese Students' Foreign Language Acquisition: Developing Student Awareness Through Experiential Learning.『筑紫女学園短期大学紀要』36, 55-77, 筑紫女学園大学

Jennings, S. (2004) English Derived Wards in Japanese: The Changes they Undergo and How they

Interfere with Japanese EFL Learners' English Pronunciation.『神田外語大学紀要』16, 557-571, 神田外語大学
Ohashi, M. (1997) Americans' Reactions to Japanese-Accented English.『中日本自動車短期大学論集』27, 89-100, 中日本自動車短期大学論叢委員会
Tajfel, H. (1978) *Differenciation between social groups: studies in the social psychology of intergroup relations*, London: Academic Press.
Toksoz, L. (2012)「日本人大学生とトルコ人大学生の個別外来語に対する受容意識について」『国文学攷』213, 1-13, 広島大学国語国文学会
相澤正夫 (2003)「日本語コミュニケーションにおける外来語使用の功罪」『日本語コミュニケーションの言語問題』79-88, 国立国語研究所
天本葉子 (2006)「英語起源の外来語」『Otsuma Review』39, 215-225, 大妻女子大学英文学会
池添博彦 (2008)「精神保健福祉で用いられる外来語について　その１　ア行よりカ行まで」『帯広大谷短期大学紀要』45, 63-70, 帯広大谷短期大学
池添博彦 (2009)「精神保健福祉で用いられる外来語について　その２　サ行よりナ行まで」『帯広大谷短期大学紀要』46, 29-36, 帯広大谷短期大学
池添博彦 (2010)「精神保健福祉で用いられる外来語について　その３　ハ行よりワ行まで」『帯広大谷短期大学紀要』47, 73-80, 帯広大谷短期大学
池田久一 (1974)「現代日本語における外来語考―英語を中心として―」『中京大学教育論叢』15(3), 717-727, 中京大学
池田佳子 (2007)「言語相互行為とアイデンティティー構築―第二言語教育への応用を考える―」『言葉と文化』8, 201-218, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
石野博史 (1983)『現代外来語考』大修館書店, 東京
石綿敏雄 (1991)『外来語の総合的研究』東京堂出版, 東京
伊藤由樹子 (2008)「和製英語の背景とその生まれ方」『二松學舍大學論集』51, 109-123, 二松學舍大学
井上逸平, 土手康瑛, 松永英美子, 内藤篤志, 友成亮太, 小西麻亜耶, 寺三希子 (2006)「コミュニケーションの生態系－現代日本の若年層言語使用を中心として－」『慶應義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション,36, 1-16, 慶応技術大学日吉紀要刊行委員会
イハス・ペーテル (2010)「カタカナ語と対人関係の構築と維持－カタカナ語の果たしている役割について－」『大分大学国際研究センター年報』2009, 16-29, 大分大学国際教育研究センター
大島希巳江 (2003)「外来語研究の一考察：英語教育との関わり」『国際基督教大学学報Ⅰ－Ａ教育研究』45, 151-158, 国際基督教大学日本語教育研究センター
大島希巳江 (2005)「日本語としての外来語―そのステイタスと日本語化プロセス－」『アジア英語研究』7, 5-25, 日本「アジア英語」学会
大谷加代子 (2007)「美容用語に見る外来語の研究1」『山野研究紀要』15, 9-14, 山野美容芸術短期大学
加藤大鶴 (1999)「首都圏における外来語平板アクセントと馴染み度」『早稲田日本語研究』7, 40-29, 早稲田大学国語学会
菊地悟 (1990)「語種イメージの分析―大学生と小学生の調査より―」『教育工学研究』12, 67-79, 岩手大学教育学部附属教育工学センター
菊地悟 (1993)「大学生の語種イメージ(2)―数量化第Ⅲ類による解析の結果―」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』3, 75-87, 岩手大学
菊地悟 (1994)「大学生の外来語意識（1）－イメージ・表記・語種意識の調査から－」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』4, 61-73, 岩手大学
北村和子, 池添博彦 (2008)「社会福祉で用いられる外来語（その１）」『帯広大谷短期大学紀要』45, 71-78, 帯広大谷短期大学
北村和子, 池添博彦 (2009)「社会福祉で用いられる外来語（その２）」『帯広大谷短期大学紀要』46, 37-48, 帯広

大谷短期大学
熊抱ゆかり (2005)「氾濫するカタカナ語－‘歯止め’から‘共生’へ－」『福岡大学人文論叢』37(2), 633-648, 福岡大学
国立国語研究所 (2004)『外来語に関する意識調査』国立国語研究所
国立国語研究所 (2005)『外来語に関する意識調査Ⅱ』国立国語研究所
国立国語研究所 (2006)『新「ことば」シリーズ19　外来語と現代社会』, 国立印刷局
国立国語研究所「外来語」委員会 (2006)『分かりやすく伝える外来語言い換え手引き』ぎょうせい, 東京
斉藤早苗, 渡邊容子(1997)「専門英語教育（ESP）から見た文化の多様性に伴う外来語研究―老人看護と福祉分野の場合―」『JACET全国大会要綱』36, 199-202, 社団法人大学英語教育学会
陣内正敬 (2007)『外来語の社会言語学　日本語のグローカルな考え方』世界思想社, 京都
陣内正敬 (2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11, 47-60, 関西学院大学
杉島一郎 (2006)「カタカナ語の使用における中高年者と大学生の比較」『仁愛大学研究紀要』4, 45-56, 仁愛大学
猖村清安子 (2007)「国立国語研究所『外来語言い換え提案』について」（Ⅱ）～第２次アンケート調査の結果と分析～」『山口国文』30, 140-93, 山口大学
スワレス・アーマンド, 田中ゆき子 (2001)「日本人学習者の英語発音に対する学習態度について」『新潟青陵大学紀要』1, 99-111, 新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部
鈴木俊二 (1997)「接触言語学から見た日本語の外来語」『紀要』12,17-53, 国際短期大学
鈴木俊二 (1999)「日本における「外来語」観の変遷－接触言語学の視点からの考察」『紀要』14, 27-94, 国際短期大学
鈴木俊二 (2000)「日本語の中の外来語の研究動向－研究方法と文献目録」『国際短期大学紀要』15, 25-102, 国際短期大学
関根健一 (2003)「新聞記事の中のカタカナ語」『日本語学』22(8), 30-39, 明治書院
仙波光明 (2002)「「ライフライン（lifeline）」という言葉―専門用語である外来語の受け入れと広がり方―」『徳島大学国語国文學』15, 37-27, 徳島大学
田中建彦 (2002)『外来語とは何か　新語の由来・外来語の役割』鳥影社
手島邦夫 (2008)「『外来語』言い換え提案」についての一考察－秋田高専専攻科学生の理解度調査から―」『秋田工業高等専門学校研究紀要』43, 102-108, 秋田工業高等専門学校
手島邦夫 (2009)「『外来語』言い換え提案」についての一考察 (2) －秋田高専専攻科学生の理解度調査からー」『秋田工業高等専門学校研究紀要』44, 107-114, 秋田工業高等専門学校
外山滋比古 (1994)「外来語を受け入れる心理」『ことば読本外来語』48-60, 河出書房新社, 東京
鳥飼玖美子 (2007)「カタカナ語に見る意味のずれ」『言語』36(6), 52-59, 大修館書店
成田徹男, 榊原浩之 (2004)「現代日本語の表記体系と表記戦略―カタカナの使い方の変化―」『人間文化研究』2, 41-55, 名古屋市立大学
ネウストプニー, J.W. (2000)「ネットワーク：規範性とインタレストの問題」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究－最終報告－』37-52, 日本語教育学会
橋本和佳 (2010)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房, 東京
八田恵 (1994)「外来語の理解度調査」『学海』10, 149-157, 上田女子短期大学
林伸一 (2011)「異文化の受容形態としての外来語・外国語の問題―表記とご酒の観点から考える」『異文化研究』5, 57-70, 山口大学人文学部異文化交流研究施設
ファン・サウクエン (2003)「日本語の外来性（Foreigness）：第三者言語接触場面における参加者の日本語規範及び規範の管理から」『接触場面と日本語教育　ネウストプニーのインパクト』3-21, 明治書院, 東京
ファン・サウクエン (2010)「異文化接触－接触場面と言語」『シリーズ朝倉言語の可能性８　言語と社会・教育』75-99, 朝倉書店
船津ミシェル (1993)「和製英語による心理的干渉について－日本の青少年に見られる和製英語によって生じる学習障害－」『北海道東海大学紀要人文社会科学系』6, 89-103, 北海道東海大学

細田由利 (2008)「『第二言語で話す』ということ－カタカナ英語の使用をめぐって－」『社会言語科学』10(2), 146-157, 社会言語科学会
堀切友紀子 (2010)「英語を母語とする日本語学習者の外来語使用行動の実態とその背景要因」『言語文化と日本語教育』39, 104-111, お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
堀切友紀子 (2011)「英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・行動と異文化受容態度との関連」『人間文化創成科学論叢』14, 187-195, お茶の水女子大学大学院『人間文化創成科学論叢』編集委員会
松浦明 (2006)「カタカナ外来語研究」『語学教育研究論叢』23, 97-114, 大東文化大学
松田裕 (1991)『日英語の交流－異文化接触のアスペクト－』研究社, 東京
丸山孝男 (1978)「外来語の問題と英語教育」『明治大学教養論集』113, 113-132, 明治大学教養論集刊行会
三輪真之 (2001)「建築関連語の語種による語感の相違に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』544, 157-162, 社団法人日本建築学会
宮本佳美 (2004)「外来語「言い換え」提案に関する一考察」L&C: journal, comparative studies of language and culture, 2, 101-136, 四国学院大学
モトワニ・プレム (1991)「日本語教育のネック－外来語」『日本語教育』74, 28-33, 日本語教育学会
森光有子, 中島寛子 (2008)「日本に溢れるカタカナ語とその影響－大学生のカタカナ語の認識と英語学習－」『相愛大学研究論集』24, 67-94, 相愛大学
山田雄一郎 (2005)『外来語の社会学　隠語化するコミュニケーション』春風社, 横浜
山田雄一郎 (2007)「現代のコミュニケーションと外来語」『言語』36(6), 22-29, 大修館書店
山田雄一郎, 難波恭子 (1999)「外来語批判―最近50年間の新聞資料の検討―」『広島修大論集　人文編』40(1), 143-181, 広島修道大学
ロング・ダニエル (1992a)「対外国人言語行動の実態」『日本語研究センター報告』1, 57-81,大阪樟蔭女子大学
ロング・ダニエル (1992b)「日本語によるコミュニケーション－日本語におけるフォリナー・トークを中心に」『日本語学』11(13), 24-32, 明治書院
宛金章, 佐藤正光 (2007)「接触言語と文化理解の関係について」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ』58, 107-112, 東京学芸大学